
Lost Memory

如月 らいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Memory

【Nコード】

N0274A

【作者名】

如月 らいち

【あらすじ】

目覚めると僕は記憶を失っていた。目の前には僕の彼女が…。悲しい記憶が蘇る。切ないラブストーリー

（前書き）

どんどん感想お待ちしてます♪

目が覚めると、目の前に知らない女性がいた。

「おはよう。やっと起きた？」

「……君は……誰？」

彼女の顔がみるみるうちに雲っていくのが、手に取るようにわかった。

言葉が出ない、そういった感じた。

彼女は僕に背を向けてすすり泣きしていた。

慌てて荷物を取り寄せて、ドアをボタンと閉めて部屋を出ていった。

一体誰だったんだろう？記憶の糸を手繰り寄せるよう、思い返してみたが、ダメだ。

全くわからない。

思い出せば思い出そうとする度、頭がズキズキと痛む。

僕は考えるのをやめ、ぼーっと古びた天井を眺めていた。

明くる日、彼女はまた僕の病室にやって来た。

彼女の名前はリサと言らしい。

名前を聞いても今一つピンとこない。

彼女は僕に色々と思ひ出話を聞かせた。

僕は少しずつだったけど、記憶を取り戻していった。

リサは、そう、僕の恋人だ。

愛する彼女を忘れてしまうなんて……最低な男だ……。

だけど、僕はまだ重要なことを忘れているような気がした。

記憶喪失ってそっいや生きていくのが苦痛になるほど悲しい過去を抱えると、自分の精神を守るため記憶を閉まっておくんだっけ……。

こんなことやどうでもいいことは覚えてるのに、彼女に関する記憶だけがすっぽり抜け落ちていた。

次の瞬間彼女は涙ぐみながら確かにはつきりところ言った。
「お兄ちゃん、愛してる……。」

全ての記憶が鮮明に蘇り、僕の頬には一筋の涙が流れた。
愛する彼女は血の繋がった妹。

「うわああああ！」

僕は叫び狂ってそのまま気を失った。

（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274a/>

Lost Memory

2010年10月20日18時47分発行